

東洋學藝雜誌第八號

明治十五年五月廿五日發兌

○羅馬字ヲ以テ日本語ヲ綴ルノ說(前號ノ續)

大學理學部教授 矢田部良吉

羅馬字ヲ以テ日本語ヲ綴ルノ益、上ニ言ヘルカ如シト雖  
 亦一二ノ阻礙無キニ非ス、其主タルモノハ左ノ一事ナ  
 リ、千百年來支那ヨリ移シテ、殆ド日本固有ノモノ、如キ  
 書籍少ナカラス、又日本大家ノ著述ニシテ純粹ノ漢文ヲ  
 用ヒ、或ハ漢字ト假名ヲ混合シタル書籍甚タ多シ、勿論格  
 物ニ關スルモノハ少ナクシテ實學ニハ、殆ト用ナケレトモ、  
 詩、歌、論說、文章、歴史等ニ至リテハ、風雅ヲ逞ヒ、古典ヲ  
 温子、人性發達ノ理、社會開進ノ摸樣ヲ講究スルノ料ニ缺  
 ク可ラサルモノナリ、然ルニ今漢字ヲ廢棄セバ、後世此等  
 ノ諸書ヲ讀ム能ハサルニ至ル可シ、此事乍ナ見レハ困難  
 ヲ免レサルカ如シト雖ドモ、深ク考フレハ敢テ患ト爲ス  
 ニ足ラサルヲ知ル、蓋シ漸々羅馬字ノ流行スルニ及ヘバ、  
 隨テ貴重ノ古書ハ之ヲ翻刻スルモノ出ヅ可シ、且現今西  
 洋諸國ニ拉丁語學者ノ多キカ如ク、日本ニモ長ク漢學者  
 流ヲ遺シテ、其學ヲ絶タサルヲ疑ナキナリ

儲又羅馬字ノ便ナルヲ確知シ、之ヲ實地ニ用フルニ方リ  
 テハ、先ツ一定ノ規則ヲ設ケ、之ニ據ラサル可ラス、此規  
 則ハ簡易ヲ主トシ繁雜ヲ省キ、假名ノ用法ニ拘泥セス、勉  
 テ音聲ヲ以テ標準ト爲ス可シ、然レトモ亦此ニ稍、困難ノ事  
 アリ、例ヘハ日本各地方ノ音聲一樣ナラス、西京ノ音聲ヲ  
 用フレハ奥州ノ人解シ難ク、奥州ノ音聲ヲ用フレハ西京  
 ノ人解シ難シ、然レトモ此ノ如キ方言ノ差違ハ、今一々顧ル  
 ニ違アラス、因テ先ツ東京ノ如キ大都會ノ音聲ヲ以テ標  
 準トシ、少シク取捨折中ヲ加ヘテ、一定ノ規則ヲ設クヘキ  
 ナリ、是レ一人ノ能ク爲シ得ヘキ所ニ非レハ、同志力ヲ合  
 セテ之ニ從事シ、以テ其完全ヲ計ラサル可ラス、且ツ各羅  
 馬字ノ用法ニ至リテモ、協議勿論ニテ、余モ亦之ニ就テ鄙  
 見ナキニアラサレトモ、此ハ他日ヲ俟テ詳述ス可シ、  
 斯クテ一定ノ規則ヲ設ケ、羅馬字ヲ用フルニ決シ、之ヲ全  
 國ニ普及スルニハ、更ニ如何ノ方法ニ依ルヘキ、是レ又考  
 ヘサル可ラス、愚見ヲ以テスレハ、其一ハ西洋ノ學術ニ通  
 スル人相議シテ、其自ラ著ハス所ノ高尙ナル論文等ヲ先  
 ツ羅馬字ニ寫ス是レナリ、蓋シ學術上ノ深理ヲ考覈スル

ノ諸論文ハ、常人ノ爲メニスルモノニ非レハ、尋常ノ文字ヲ以テスルヲ要セス、且ツ譯シ難キ西洋語ハ、譯サスシテ用フルモ可ナリ、是レ此ノ如キ論文ヲ讀ム人ハ、固ヨリ西洋語ヲ解スル人タルヘケレハナリ、又次ニハ世上ニ廣ク行ハル、書ヲ翻刻スルモ可ナリ、此ノ如クセル書ハ始メハ讀ムモノ少ナカルヘキモ、漸次世上ニ羅馬字ノ書ヲ廣布スルニ缺ク可ラサルノ要具タリ、コヽニ於テ學者輩更ニ一致シテ羅馬字ヲ用フルノ緊要タルヲ我文部省ニ建議シ、全國小學校ニ於テ其用法ヲ三四月間生徒ニ教授スルノ制ヲ設ケンコトヲ乞フヘシ、蓋シ羅馬字ノ用法ハ甚タ簡易ナルモノナレハ、之ヲ示セル小冊子ヲ編シ、子弟ニ授クレハ三四月ニシテ之ヲ學知スルハ、余ノ信スル所ニシテ、此ノ如クスルコト十年ニ及ヘハ羅馬字ノ全國ニ普及スルコト疑フ容レサルナリ、

左ニ羅馬字ヲ以テ日本文ヲ綴リタル例ヲ擧グ、其方法未ダ完全ナラサレモ、其容易ナルコト知ルヘシ、頃口聞ク我邦在留外國人ハ、既ニ羅馬字ヲ以テ鳩翁道話ヲ翻刻セリト、余未タ其書ヲ見スト雖モ外人ノ敏捷ナル、必ス參考シテ

益アルモノナルヘシ、

Jichin oshō Shūgyokushū no Imayū

Haru no yayoi no akebono ni.

Yomo no yamabe wo miwata seba,

Hanazakari kamo shirakumo no

Hakara nu mine koso nakari kere.

Hanatachibana mo niō nari,

Moki no ayame mo kaoru nari ;

Yūgure-zawa no samidare ni

Yama-hototogis-nanori shite.

○分子ノ重量

理學士 磯野徳三郎

余ハ既ニ分子ノ解ト題セル論文ニ於テ、分子說ノ據テ起ル所ヲ指示シ、現今ノ理學者ハ粗ホ分子ノ大小、及若干容中ノ箇數ヲ測定スルノ度ニ達セルコトヲ證明セリ、之ヲ再言スレハ、分子ハ實驗上ヨリ視量セル物質ノ細粒ニシテ、恰モ星學ノ日月星辰ニ異ラサルナリ、唯其異ル所ハ大小ニアルノミ、甲ハ最微ノ極ニシテ、乙ハ最大ノ極ナリ、甲ハ眼見ルヘカラサルモノニシテ、乙ハ碧落ノ間ニ灼々タリ、

均ク是レ物質ノ塊ナリ、星辰若シ其大小輕重ヲ測定スヘク  
 ンハ、分子モ亦測定スヘシ、夫レ一塊ノ石、一壘ノ水ハ  
 直接ニ其重量ヲ驗知シ得ヘク、至大至微ノ兩極ニアル所  
 ノ分子、及星辰ハ間接ニ之ヲ驗知シ得ヘシ、何ソ唯眼之ヲ  
 見、手之ヲ捉リ得ルノ物質ノミニ止ランヤ

凡ソ物ノ重量ヲ驗定セント欲セハ、先ツ吾カ、若クハ佛  
 ノグラムノ如キ一ノ定位ヲ要スルモノナリ、故ニ化學者  
 ハ諸種ノ分子ヲ秤量スルニ當リ分子中最輕キ水素一分子  
 ノ重量ノ二分一ヲ以テ定位トシ、之ヲマイクロクリスト  
 名ク、猶蒸餾水一立方センチメートルノ重量ヲ佛國度量  
 ノ定位トシ、之ヲグラムト呼フカ如シ、蓋シ攝氏ノ零度風  
 雨錶ノ高サ七百六十ミリメートルノキニ、水素一リトル  
 ノ重量ハ〇、九グラムニシテ、氣體一リトル中含ム所ノ  
 分子ノ數ハ  $10^{23}$  ナルヲ以テ、マイクロクリスハ〇、九グラ  
 ムヲ十ノ二十三乗ニテ除シタル得數ノ二分一、即チ左ノ  
 如キ數ト知ルヘシ

化學者ハ既ニマイクロクリスヲ以テ定位トセリ、然ラハ

$$\frac{0.9}{10^{23}} \times \frac{1}{2} \text{ グラム}$$

則チ諸種ノ分子ヲ秤量スル法如何ソ、毫モ尋常ノ物質ヲ  
 秤量スルニ異ラス、唯一箇ノ秤衡ヲ要スルノミアムペ  
 ル及アヴォカドロノ通法ニ曰ク、氣體ニ變セル諸物質ノ  
 同容ハ同數ノ分子ヲ含有スト、故ニ水素ト比較セル氣體  
 ノ比重ヲ驗定セハ、直ニ其分子ノ重量ヲ測知シ得ヘシ、何  
 トナレハ比重トハ同容ヲ有スル水素ヨリモ氣體ノ重キ  
 幾倍ナルヲ示スモノニシテ、而シテ同容ノ氣體ハ同數ノ  
 分子ヲ含ムモノナレハ、其分子ノ水素分子ヨリ重キト亦  
 比重ニ同シカラサルヘカラサレハナリ、例之ハ酸素ノ比  
 重十六ナリ、故ニ酸素ノ水素ヨリ重キト十六倍ナルヘシ、  
 然レハ酸水二素ノ同容ハ通法ノ如ク同數ノ分子ヲ含ムヲ  
 以テ、酸素分子ハ水素分子ヨリ重キト十六倍ナルト明白  
 ナリ、但シ水素一分子ノ重量ハ二マイクロクリスナルカ  
 故ニ、酸素一分子ノ重量ハ二乗ノ十六、即チ三十二マイク  
 ロクリスナリ左ニ示ス所ノ比例式ヲ檢セハ一目瞭然ナラ  
 シ、

(H)	1 :	16 ::	1	16
水素			$\frac{1}{10^{23}}$	$\frac{16}{10^{23}}$
酸素				
水素一分			子ノ比重	酸素一分
子ノ比重				子ノ比重

(II)  $\frac{1}{10^{23}}$  :  $\frac{16}{10^{23}}$  : : 2 : : 32

マイクログリス  
マイクログリス

ニテ秤レル水素  
ニテ秤レル酸素

一分子ノ重量  
一分子ノ重量

○學術上ノ譯語ヲ一定スル論

菊地大麓

學術研究ニ最モ必要ナル事ノ一ハ、其名辭ノ確當ナルヲ是レナリ、更ニ之ヲ云ヘハ、同一ノ名辭ハ常ニ同一ノ意義ヲ表ハサシメ、二三ノ事ニ通用セシム可カラズ、又同一ノ事物ハ常ニ同一ノ名辭ヲ以テ之ヲ指シ、一物ニ數名有ラシム可ラス、若シ然ラサルキハ學者互ニ相通シテ學術ノ進歩ヲ助クルヲ極メテ難シ、現今各學科日ニ月ニ進ンテ其總括スル所愈々廣ク、其研究スル所愈々密ナリ、一人ノ能ク研究シ得可キハ、唯一ノ學科中ノ一小區分ニ過サルナリ、然リ而シテ、學科相互ノ關係ハ益々密ニシテ、諸學科ハ互ニ相待テ進歩スルモノ、如シ、例ヘハ物理學ノ如キ、之ヲ修ムル者ハ、光學、熱學、或ハ電學ノ如ク、僅ニ其部分ヲ研究シ得ル而已、然レモ猶ホ他ノ學科ノ助ヲ要スルハ勿論ニテ、化學數學等ヲ知ラサレハ決シテ其蘊奧ヲ極ムルヲ能ハス、故ニ現今ノ景況ニテハ、所謂分業法ハ經濟上ニ於

ケル如ク、亦學術上ニ於テモ必要ナルモノナリ、是レヲ以テ各専門ノ學者ハ互ニ相通セサル可ラス、相通セント欲セハ、同一ノ名辭ヲ用井サル可ラサルヲ明白ナリ、西洋各國ニ於テモ、學術上ノ名辭ハ未タ完全ナラズト雖モ、略々確定シタルモノ、如シ、近頃本邦ニテ、各學科ノ行ハル、ヤ亦必ス學術上ノ名辭確定セサレハ甚タ不便宜ナリ、今學術上ノ名辭已ニ本邦ニ有ルモノ少シ、故ニ新ニ之ヲ定メサルヲ得ス、之ヲ定ムルニ人々各其好ム所ニ從ヒ、更ニ定規ナケレハ、一ノ原語ニ對シ、數多ノ譯語有リテ、原語ヲ知ラサル者ハ、之ヲ以テ相異ルモノト認ムルヤ必セリ、醫學、化學、數學等ノ如キハ、已ニ定リタル譯語無キニ非ラス、然リト雖モ其已ニ定マリタルモノハ僅々ニシテ、或ハ更ニ譯語無キモノアリ、或ハ同一ノ原語ニ數多ノ譯語有リ、或ハ同一ノ譯語ニシテ數多ノ原語ニ對スル等、其混雜實ニ言フ可ラス、今ニシテ此弊ヲ救ハスハ益々混亂シテ遂ニ如何トモス可ラサルニ至ラン、故ニ學術上ノ譯語ハ一定セサル可ラス、或ハ曰ク、原語ハ之ヲ譯スルヲ要セズ、直ニ原語ヲ取リテ

日本語トナス可シト、此方法ハ甚々簡便ナリト雖モ、外國語ノ音ハ本邦人ノ聞キ慣レサルヲ以テ、之ヲ記憶スルニ困難有リ、況ヤ邦語ニ於テ的當セル譯法有ルヲヤ、若シ全ク譯語ヲ付ス可ラサルモノ有レハ、之ヲ原語ニテ存シ置クモ亦不可ナルヲナシ、

故ニ今之ヲ譯スルモノトセハ、如何ノ譯語ヲ一定ス可キヤ、唐朝ニ於テ梵語ヲ譯セシ如ク、政府ヨリ令ヲ下シテ之ヲ定ムルハ今日ニ於テ行フ可ラサルカ如シ、然レモ政府ヨリシテ各學科ニ就キテ其專門家ヲ集メ、之ヲ委員トシテ譯語ヲ議定セシメ、之ヲ世ニ公布セハ假令ヒ之ヲ各人ノ取捨ニ任スルトモ、便利ノ爲ニ必ス之ヲ取用スルモノ多カラン、然レモ是レ政府ノ事ナレハ、容易ニ成就シ難キ事情モアルヘケレハ、又之ヲ私ニ行ハントスルモ其方法ナキニアラス、即チ現今各學科ヲ專攻スル者ハ、相結合シテ會社ヲ成セリ、今各學會ニ於テ各專門ノ名辭ヲ議定シ、其二三ノ學科ニテ、通スル名辭ニテ學會相共議シ、之ヲ定ムルモノトシ、尙ホ廣シ江湖ノ學者ニ質シ、精密ニ之ヲ改正シテ、之ヲ公布セハ、之ヲ用井ルモノ多カル可シ、然ルモ

ハ之ニ不同意ナル少數ノ人モ衆人ニ解セラレシテ欲スルモノナレハ、遂ニ之ヲ取用スルニ至ル可シ、文部省ニ於テ此舉ヲ贊成シ、之ヲ補助セハ、余ハ其容易ニ實行スヘキヲ信ス、數學會、化學會、ノ如キハ已ニ其事ニ從事セリ、他ノ學會モ亦之ニ倣ハ、之ガ爲ニ費シタル勞力、及ヒ時間ハ決シテ、徒費ニ非サルヘシ、因リテ聊カ此ニ昇見ヲ述ヘ以テ各學會ノ諸員ニ質スト云フ、

○人類ノ紀元

松下丈吉

萬物進化ノ理果テ是ナラハ、人類ノ舊キヲ亦タ明白ナリ、蓋シ人類ノ始メテ猴様ノ上祖ヲ離レ、今日ノ形狀ニ進ミタルハ今ヲ去ルヲ、大凡ソ二百六十二萬年ヨリ二百四十六萬年ノ間ナルヘシ、

現今世ニ知ラレタル國語ノ數ハ、大凡ソ一千アリト云フ、然リト雖モ是レ等ノ國語ハ本ト出處ヲ一ニシテ、各自別々ニ起ラサリシハ、亦タ疑フ可ラス、何トナレハ現ニ成立スル所ノ國語中、文法及ヒ辭書ノ密ニ相類似スルヲ以テ、其同源ニ出タルヲ、實ニ明白ナルモノアレハナリ、蓋シ國語ノ發生モ、動植物ト均シク、決テ自ラ生スル者ニ非ラ

ス、必ス之カ母語アラサルハナシ、而ノ亦タ常ニ母語ノ性質ヲ遺傳スルモノナリ、然ラハ則チ同シ母語ヨリ出タル國語ノ互ニ相類似スルハ更ニ言ヲ埃タス、今マ斯ノ如キモノヲ名ケテ國語ノ族ト云フ、故ニ若シ文法及ヒ辭書ノ互ニ相類似スルモノアルトキハ、直チニ兩者其母ヲ共ニスルヲ知ルヘシ、例之ハ法朗西、西班牙、及ヒ伊多利ノ國語ハ、其相同シキヲ以テ、共ニ之ヲ羅馬族ト稱シ、而ノ語學家ノ說ニ依レハ、皆チ羅甸ヨリ出タリト云フ、斯ノ如ク國語ノ發生モ常ニ母語ニ因ル者トセハ、羅甸ト雖モ亦タ當サニ之カ出處ナカルヘカラス、即チ希臘、波斯、梵語等ノ國語ハ、皆チ之ト同族ニ「エーリヤン」語ヨリ出タルヘシト云ヘリ、此ノ「エーリヤン」ナル詞ハ、素ヨリ學者ノ假ニ設ケタルモノニシテ、今日ニ於テ之ヲ用サルノ國民アルヲナシ、然レトモ右ノ四語ノ、互ニ相似タルヲ見レハ、名稱ノ如何ニ係ラス、必ス之カ祖先ナカルヘカラサルナリ、

斯ノ如ク順次漸ヲ逐フテ、國語ノ血統ヲ探クル時ハ、實ニ莫大ナル年限ヲ溯ラサルヲ得サルヲ、希臘、及ヒ羅甸ノ母

語、既ニ今世ニ其跡ヲ滅シタルヲ以テ知ルヘキナリ、唯タ一族ニシテ猶ホ然リ、況ンヤ世界ノ廣キ、國語ノ族モ亦タ過多ナルヘキヲヤ、今タイロル氏ノ說ニ據ルニ曰ク、全ク血屬ナキ國語ノ族ハ、殆ント一百ニ近シト、苟モ獨立ノ思想ヲ以テ「ペーベル」塔騷擾ノ迷ヲ排キ、國語モ動植物ト等シク、一或ハ二三ノ始祖ニ起元シタルヲ會得スルモノハ、必ス其舊キヲ主張スルナルベシ、然リト雖モ國語ハ人類ノ產出物ナリ、然ラハ則チ國語ノ比較ハ、人類ノ舊キヲ示スモノニ非ラスヤ、

且ヤ人種ノ散布モ、人ノ舊キヲ示スモノナリ、ハツクスレバ氏ハ人類ヲ分テ四種ト爲セリ、即チ黃色種、ブーストラリ種（鶯色種）白色種、及ヒ黑色種是ナリ、黃色種ハ主ニ東部亞細亞、太平洋洲及ヒ南北亞墨利加ヲ占メ、又タ或說ニハマダガスカルモノ之ニ屬スト云ヘリ、鶯色種ハ其名ノ如ク、壕洲ニ多ク、而シテ印度ノ南方ニ纔ニ其痕迹ヲ留ム、白色種ハ全歐土ニ散布シテ、波斯及ヒ亞拉比亞ノ如キモ之ト同族タリ、從來人種ノ區別ニ關シテハ、學者中大ニ異論アルヲニテ、是レ等ノ分類モ或ハ攻撃ヲ免レ難シト雖

モ、黒色ノ一種ニ就キテハ決ノ異論ナカル可シト信ス、今其散布ノ地ヲ案スルニ、西ノ方亞非利加ノギニーニ傳播シ其南部ヲ沿フテ、印度洋ノアンダマンヲ經、東ノ方新ギニーヨリフヒヂーニ達ス、蓋シギニート新ギニートハ、人種ノ互ニ相似タルヲ示スノ名稱ニシテ、其同種タルハ誠ニ之ニ依テ明ナリ、夫レ黃色人ノマダガスカルニ達シタルハ、全ク乗船ノ術ニ巧ナルヲ以テノ故ニシテ、左マテ驚クニ足ラスト雖モ、更ニ造船ノ術ヲモ知ラサル、黒色人ノ印度洋ノ東西ニ散在スルハ、容易ニ解スヘカラサルノ事實ナラスヤ、黒色人中或ハフヒヂーノ如キ、小舸ヲ所持スルノ人民之ナキニ非ラサルモ、是レ全ク近隣ノ黃色人ヨリ之ヲ造ルノ術ヲ得タルハ、更ニ疑ヲ容レズ、サレハ之ヲ解明スルノ術、唯ターアルノミ、即チ前地質時代ニ於テ、印度洋ノ大陸ト爲リテ、亞非利加ト新ギニートヲ連絡セシメアル是レナリ、

印度洋ノ大陸トハスケレトトルカ所謂レミューリヤニシテ、ソノ實ニ之アリシハ、嘗ニ無形ノ理論ニ依テ之ヲ推測スルヲ得ルノミナラス、尙ホ有形ノ事實ニ據テ之ヲ徴ス

ルヲ得ベシ、試ニ見ユベシガナル灣中アンダマンノ諸島ハ、特ニ其形狀ヲ觀察スルモ、前大陸ノ存在ヲ示スモノナリ、況ンヤフヲアル氏カ其頭蓋ノ研究ニ據テ、(アンダマン)族ハ現今諸處ニ散在スル、黒色人ノ始祖タルヲ證明シタルヲ見レハ、ソノ一タヒ大陸ト爲リテ、今ノ黒人ヲ出セシメ論ヲ竣タス、

今亞非利加ニ入りテ之ヲ視察スルニ、サハラ以北ノ動植物ハ歐土ノ種類ニ近ク、サハラ以南ノ動植物ハ、却テアンダマン等ノ種類ニ似タリト云フ、誠ニ奇怪ノ至ナラスヤ、然リト雖モ是レ南亞非利加ノ右ノレミューリヤト接近シタル明白ナル證據ニシテ、其時ニ當テハサハラノ砂漠ハ必ス海底ナリシナルベシ、何トナレハ之ニ依テ其奇異ナル動植物ノ散布ヲ理會スルヲ得ルノミナラス、現ニ歐洲ノ一大問題ナル、氷田時期ノ説明ヲ助クルモノアレハナリ、夫レサハラノ歐洲ノ氣候ニ大ナル勢力ヲ有スルハ、學者ノ皆ナ知ル所ナリ、今マ假ニサハラヲ除キタリトセシカ、歐洲ノ氣候ニ一二度ノ温熱ヲ減スルハ必然ナリ、然レトモ此事實ニ起リタルハ、今マサハラヨリ掘出ス所ノ

貝ノ、現ニ地中海ニ住スル所ノモノト同一種ナルヲ以テ  
 證スヘシ、而シテ恰モ氷田ノ時期ニ會シ、幾分カ其凍寒ヲ  
 助ケタルニ非ラスヤ、之ヲ要スルニ黑色人ノ散布ハ、印度  
 洋ノ大陸ト爲リテ、南亞非利加ト新ギニートノ連絡ヲ通  
 セシ時ニ起リタルヲ明ナリ、然リ而シテ大陸ノ海底ト成  
 リ、海底ノ大陸ト成ルハ、誠ニ容易ノ事ニ非ラス、然ラハ則  
 チ人種散布ノ考究モ、亦タ人類ノ舊キヲ示ス者ニ非スヤ、  
 今マ一箇ノ、人類ノ舊キヲ示スモノアリ、文明ノ進歩即チ  
 是ナリ、鹿ヲ逐フノ獵夫ハ山ノ深キヲ知ラス、文明ノ恩澤  
 ニ浴スルモノハ、ソノ因テ來ル所ヲ究メスト雖モ、今日ノ  
 文明ハ決シテ一朝一夕ノ故ニアラスシテ、必ス單ヨリ複  
 ニ進ミ、純ヨリ雜ニ移レルモノナリ、故ニ今日ノ文明如何  
 ニ美ナルモ、皆ナ一度ハ粗野ノ形狀ヲ經歷セサルハナシ  
 例ヘハ今マ神符ヲ服シテ疾病ヲ治スルカ如キ、古ヘ神官  
 ト醫者ト一ナリシヲ思フヘシ、又新夫ニ水ヲ掛ケ石ヲ  
 投スルカ如キ、古ヘ奪掠婚姻ノ行ハレシヲ想フヘシ是  
 レ等ハ皆ナ太古ノ事ニシテ、其舊キハ敢テ疑フ可カラズ  
 ト雖モ、唯タ其遺俗ニ依テ之ヲ想像スルノミ、其時代ノ如

キハ、之ヲ決スルヲ甚タ難シトス、故ニ人類ノ年代ヲ尋ル

ニハ器具ノ沿革ヲ研究スルニ勝ルハナシ、

西洋ニテハ器具ノ沿革ニ基キテ、文明ノ進歩ヲ鐵器時代

青銅器時代、及ヒ石器時代ノ三大時期ニ分テリ、此ノ區別

ハ實際上大ニ有用ナルモノニシテ、曖昧ナル開化、未開及

ヒ野蠻ノ分類ニ比スレハ、遙ニ勝ル所アリトス、(未完)

○度量衡說 附貨幣

理學士 鮫島 晋

佛國貨幣

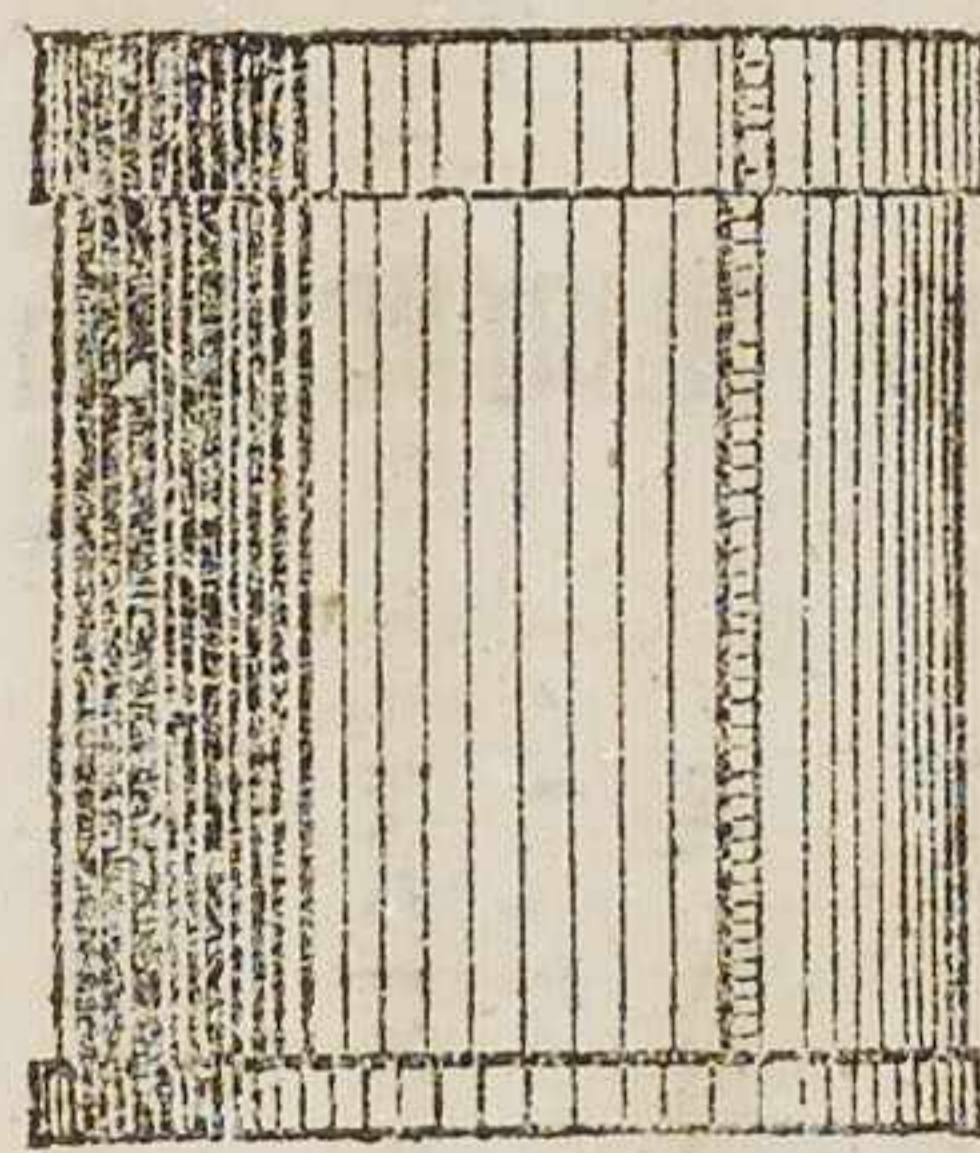
佛國貨幣ノ原位ヲフランクト謂フ、殆ント我二十錢ニ當  
 ル、フランクハ圓形ノ銀貨ニシテ、表面ニ政府ノ極印ア  
 リ、其重サ五グラーム中、銅千分ノ百六十五ヲ含ム、他ノ  
 貨、皆此ノ比  
 例ニ倣フ、  
 金銀銅三種ノ貨幣アリ、今其種類、品目、及ヒ大小輕重等  
 ヲ、左ノ表ニ掲ク、

種類	品目	重 (ミリメ)	徑 (ミリメ)	重千分増減
金	百フランク	三二、二五八〇	三三	一
貨	五十	一六、一二九〇	二八	二
	二十	六、四五一六	二一	二
幣	十	三、二二五八	一九	二、五
	五	一、六一二九	一七	三

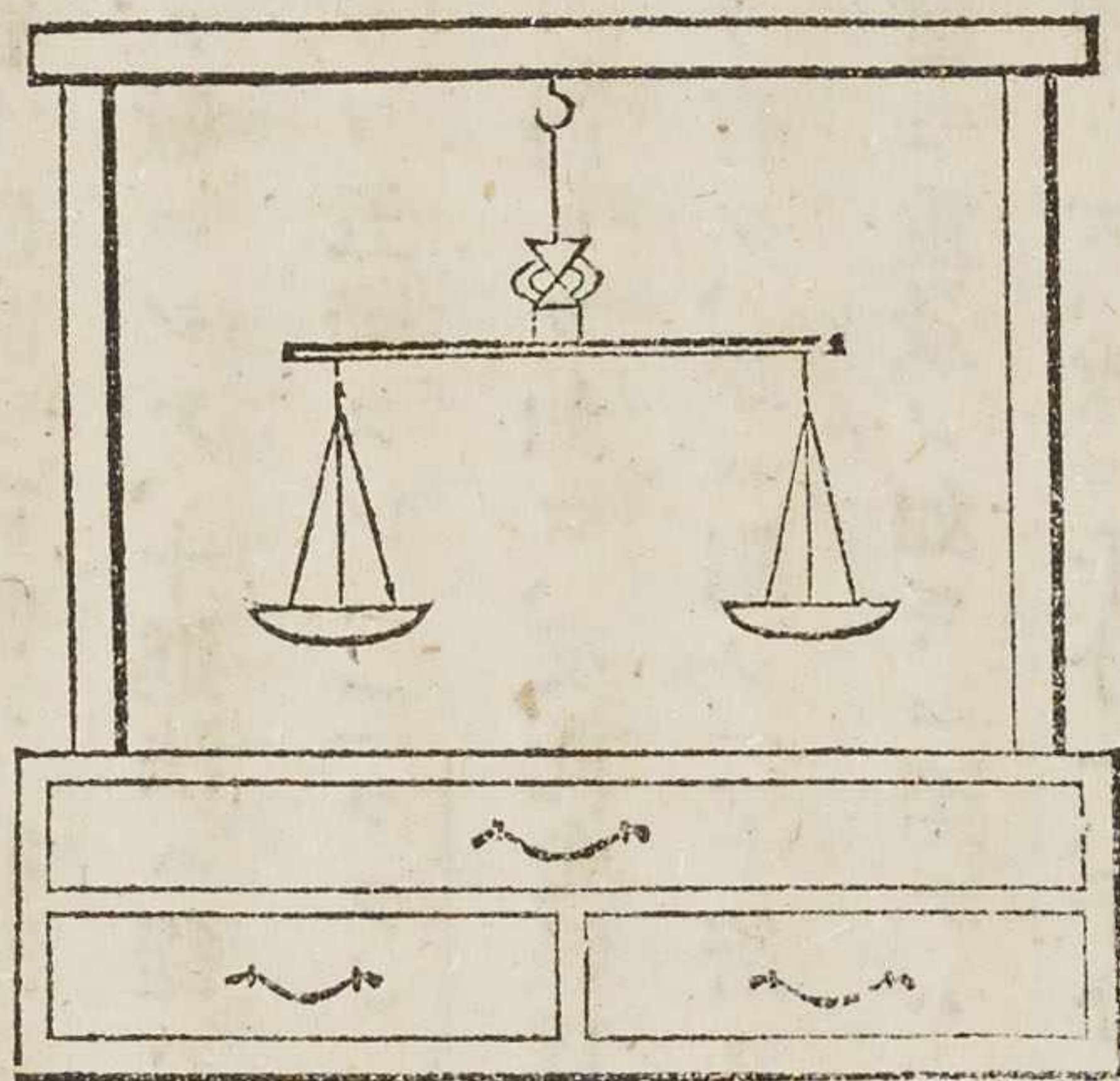




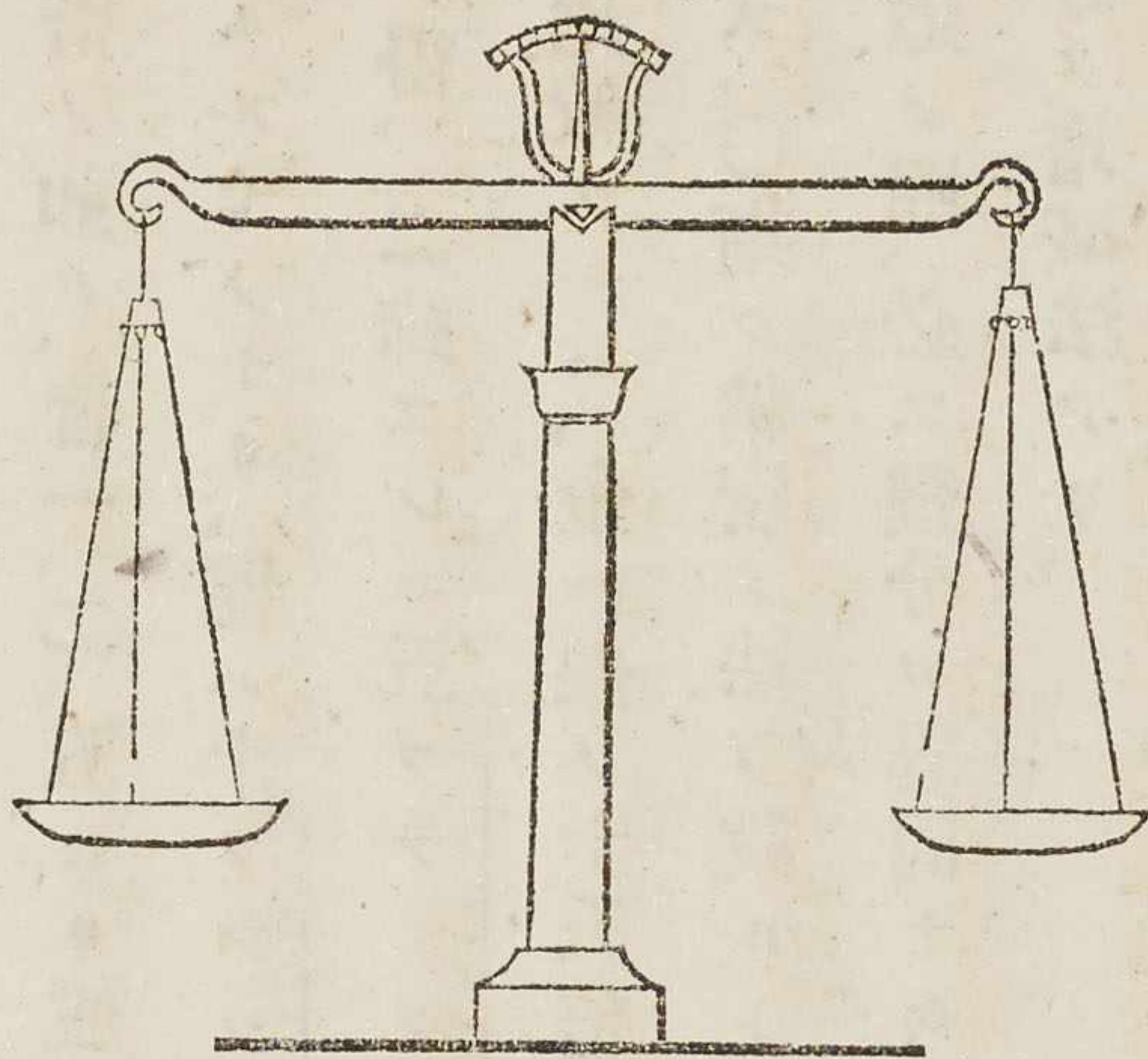
第十圖



第十五圖

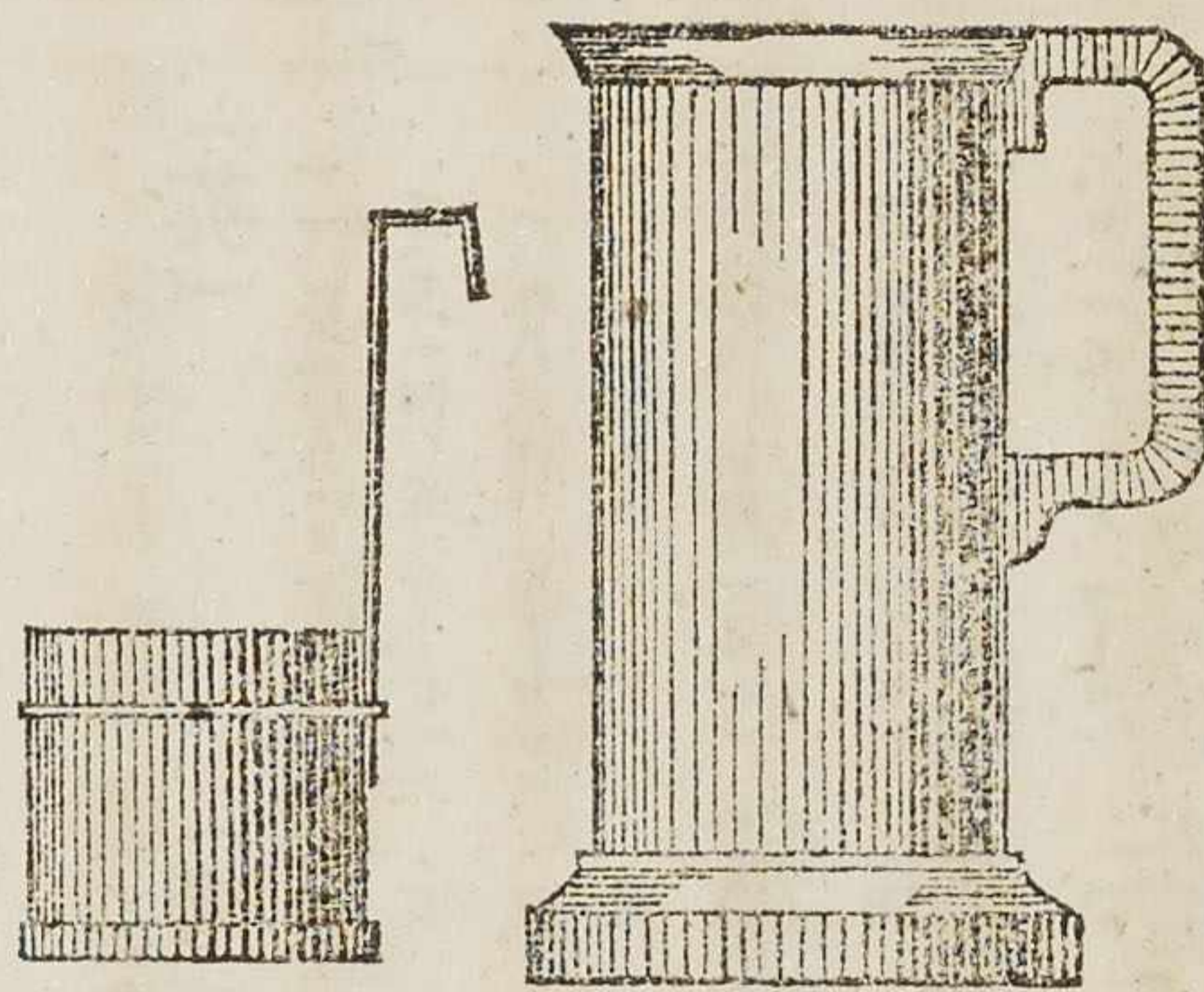


第十七圖



第二十圖

第十一圖



本圖中第一第二第三第九第十三第十四第十六及第十七圖以下ハ最モ尋常ノモノニシテ世人ノ能ク知ルトコロナレハコレヲ畧ス

○支那紙幣史畧

夫レ支那ノ國タル、上古既ニ文化ノ域ニ達シ、方今歐米各

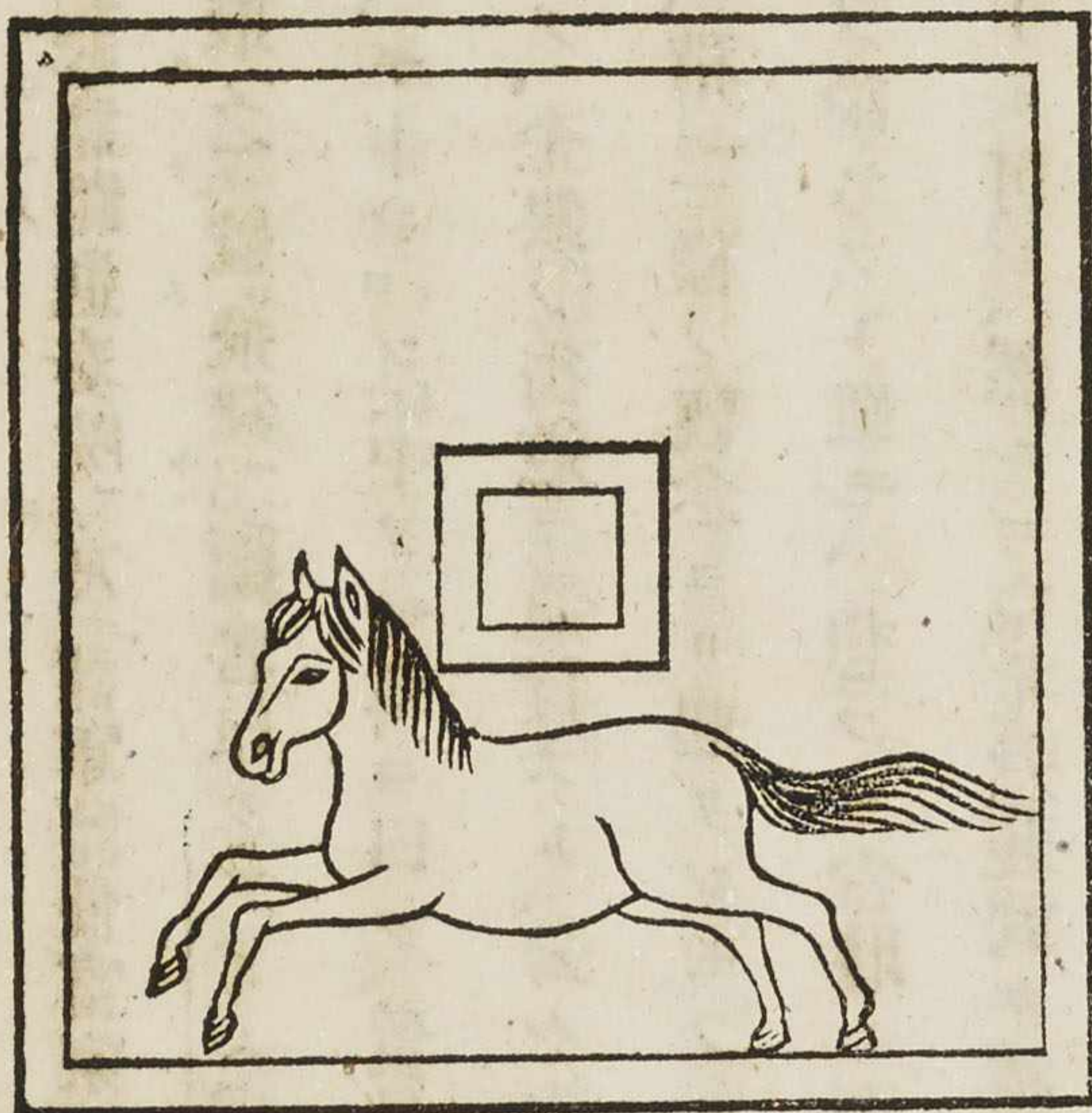
編者識

平沼淑郎

國政治上ニ、理財上ニ、其他百般社會ノ現象モ、支那ニ在テハ遠ク上代ニ於テ、業ニ已ニ經歷シ來レルモノ、如シ、就中今日ノ一大問題タル紙幣ノ如キ、歐洲各國之レカ爲メニ艱苦ヲ嘗メタルハ、僅ニ近世ノ事ナリト雖モ、支那ノ史乘ヲ繙閱スルニ、二百有餘年前ニ於テ、已ニ之ニ類スルモノアルヲ見ルナリ、殊ニ宋、元、明ノ頃ニハ、紙幣ノ價大ニ損折シ、物價頓ニ翔騰シ、蒼生憔悴ノ狀言フニ忍ビサルモノアリ、予ハ今マ茲ニ支那代<sup>レブレセンテチーウ、カレンシー、</sup>用幣ノ起原ヨリ明末ニ至ルマテノ沿革ヲ畧叙シ、以テ大方ノ笑覽ニ供ス、讀者自ラ其通融ノ狀況、及ビ其壅滯ノ原由ヲ了セハ、蓋シ其無用ノ辨ニ非サルヲ見ルヘシ、

支那紙幣ノ起原ハ何レノ時ニアリシカヲ原ヌルニ、或ル書ニ軒轅ノ臣伯陵始<sup>テ</sup>以<sup>ニ</sup>布帛<sup>ヲ</sup>爲<sup>ル</sup>楮幣<sup>ト</sup>アリ、軒轅ノ世ハ今ヲ距ル<sup>ル</sup>凡<sup>ソ</sup>四千五百有餘年ナリ、其時果シテ此事アリシヤ否ヤヲ確知スルコト能ハス、ヨシヤ然<sup>ル</sup>事<sup>ノ</sup>アリシモ未ダ以テ理財ヲ學フノ幫助トスルコトヲ得サルナリ、何ントナレハ其何故ニ作ラレシカ、又タ其如何ナル結果ヲ生セシカヲ知ル<sup>ル</sup>能ハサレハナリ、

圖二第



諸侯以聘享ト、是レ  
書ニ曰ク、古者皮幣  
ヲ參考スベシ、平準  
ノハ、讀者宜シク之  
貨志等ニ詳ニ論シア  
ノ平準書、漢書ノ食

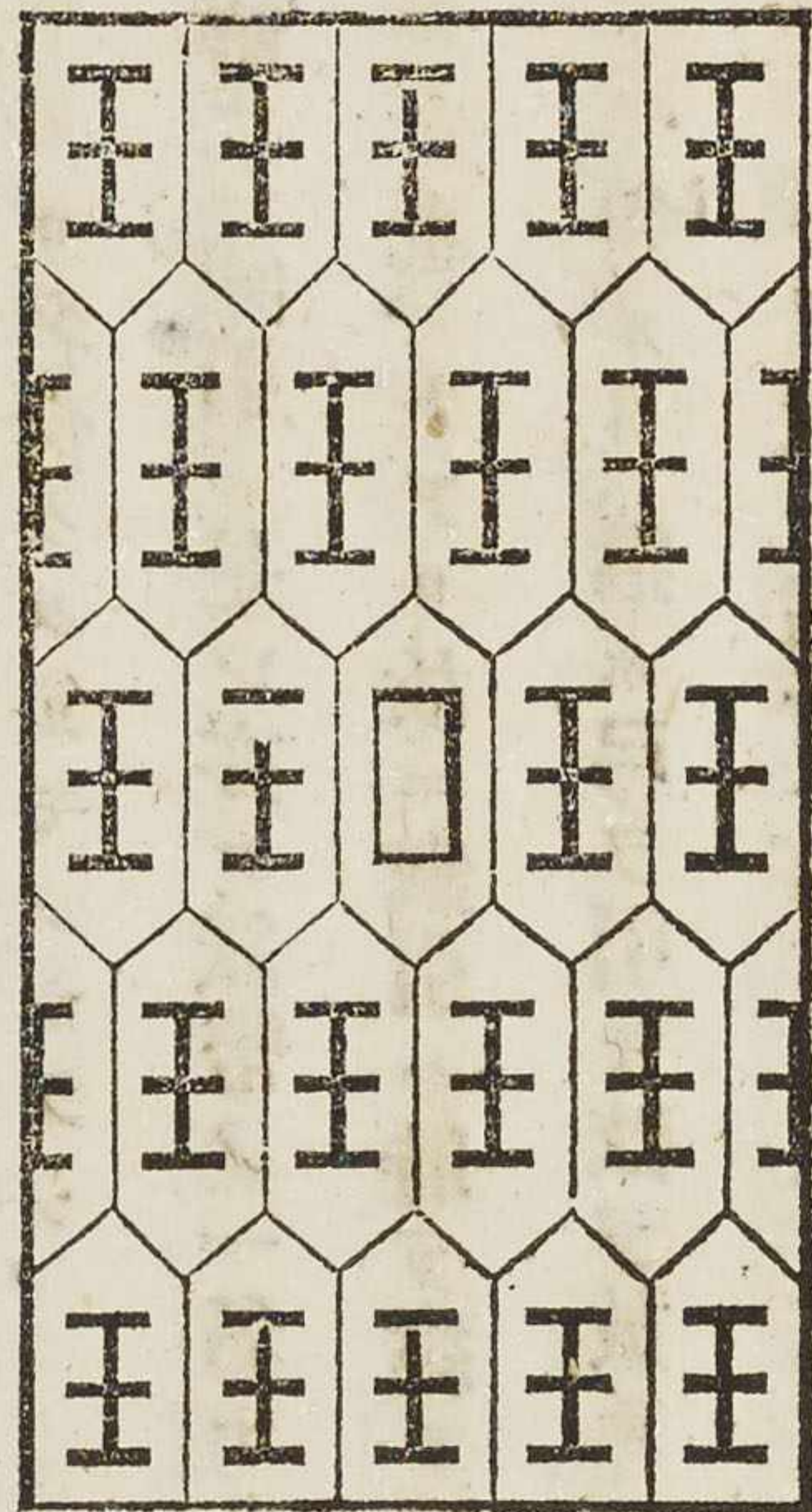
圖一第



シ、王侯宗室朝覲ノ  
シ、績ヲ以テ之ヲ縁  
キニハ、必ス之ヲ薦  
壁セシム、此事史記  
ノ平準書、漢書ノ食

漢武帝即位ノ時ハ、文物漸ク隆盛ニ至リ、國威ヲ四方ニ輝  
カシタレト、禁闔ノ裡、驕奢放佚ニシテ、上ハ倉廩大ニ空  
ク、下ハ富賈財貨ヲ滯藏シ、黎民ノ困難實ニ甚シク、武帝  
即チ公卿ト議シテ更  
ニ錢幣ヲ造リ、以テ  
用ヲ贍ス、其法禁苑  
ノ白鹿ヲ取リ、之レ  
カ皮ヲ方尺ニ截斷  
シ、績ヲ以テ之ヲ縁

圖三第



ニ由テ之レヲ觀レ  
ハ、古ヘニモ亦タ  
皮幣アリシモノナ  
ルベシト雖モ、未  
ダ考按セス武帝ノ

皮幣ヲ造リシハ、實ニ元狩四年ニシテ、即チ我開化天皇即  
位四十年ノ頃ナリ。是時ニ當リ武帝又タ銀、錫、白金、三種  
ヲ造ル、文獻通考ニ曰ク、其一曰。重八兩。圓之其文龍。名  
曰撰。直三千。第一圖ヲ見ルベシ。其二曰。以ニ重差小一方之其文馬。直五  
百。第二圖ヲ見ルベシ。其三曰。復小楯之。其文龜。直三百。第三圖ヲ見ルベシ。一重  
八兩則二兩六兩三重四兩。ト第一第二第三ノ三圖ハ、佛朗  
西宣教師ペール、ヂユ、ハルド著支那帝國記ノ第  
二卷第百六十六葉ニアルモノヲ贍寫セシモノナリ。此幣  
行ハレテヨリ、人民、官吏、盜鑄スルヲ頻ナリ、天子之ヲ止  
メント欲スルモ止ムルヲ能ハス、其歲末ニ至リテ通融遂  
ニ止ム、  
次ニ唐ノ憲宗ノ時ニ至リテ、飛錢ト唱フルモノアリテ國  
中ニ通行ス、即チ紙幣ナリ、文獻通考ニ曰ク、時商估至京師

委錢諸路進奏院。及諸軍諸使富家。以輕裝趨四方合券乃取之。號飛錢。編者曰クアダム、スミス著「ウエルス」ヲフ、チーシヨ「中」ノ一章ニ曰ク、貿易工作ハ紙幣ノ羽翼ニ乗ノ、金銀ノ街道ヲ通行スト、云々當時飛錢ノ名ヲ下セシモ、稍一様ノ觀念ヨリ起リシモノナラン歟、唐史詳ニ此事ヲ論セスト雖モ、想フニ當時ニ在テ頗ル便益アリシモノナル可シ、然ルニ京兆尹裴武カ請ニ因リ、遂ニ之シカ發行ヲ禁止セラレタリ、予未タ其何ノ爲メナルカヲ詳ニセサルナリ、是レヨリ家々財貨ヲ滯藏シ、錢幣ノ通融スルモノ、大ニ減少シ、物價從テ大ニ輕シ、是ニ於テ其鹽鐵ヲ飛錢ト交換セシムルニ千緡每ニ百錢ノ増准ヲ課セシム、而プレミヤムノ商人ノ戸部ニ至ルモノナキハニ當リテ、復タ貨幣ト敵シテ之ヲ易ヘシム、此後紙幣ノ專史上ニ見エス、蓋シ政府ノ信用大ニ損折ノ、遂ニ全ク通融セサルニ至リシモノナラン、是レヨリ先キ累世貨幣ノ制度、大ニ亂レ、商估自營ノ道ヲ失ヒ、政府理財ノ法ニ苦ミ上下慘毒、楚庸ノ狀譬フルニ物ナシ、是時ニ當リテ紙幣ノ始テ行ハレタルヤ、譬ヘハ霖雨ノ後チ日光ノ黑雲ヲ排除シテ現出シタルカ如シ、而

シテ其消ユルノ速ナル、猶ホ春雪ノ旭陽ニ逢フカ如ク、理財學生ヲノ其結果ヲ探知セシムルニ術ナキヲ奈何セン、以上論シタル漢及ヒ唐ノ代用幣ハ、未タ詳ニ其因テ起リシ所以ノ理由、之レカ制度ノ如何、其結果ノ如何、等ヲ知了スルヲ能ハサレハ、予ハ此等ニ就テ一定ノ論評ヲ下スルヲ得サルナリ、而シテ宋史ヲ按スルニ至リ始メテ紙幣制度ノ詳ナルヲ見ルヲ得、故ニ予ハ先ヅ紙幣ノ因テ起ル所以ヲ畧論シ、逐次ニ其増發及ヒ歴代艱難ノ梗概ヲ論セントス、

然レモ宋朝ノ紙幣ヲ論スルニ當リテハ、先ヅ終始用フル所ノ數語ノ定義ヲ明カニシ、讀者ヲノ善ク之レヲ解セシムルヲ要ス、

(第一) 便錢 紙幣ノ一名ニシテ其貿易上ニ便益アルヨリ名付ケタルモノナラン、

(第二) 錢引 是レ亦タ紙幣ノ一名ナリ、引ハ說文ニ開弓也、トアリ故ニ錢引ハ時ヲ經テ貨幣ト兌換スルヲ得ルヲ、猶ホ弓ヲ引キ弦ヲ放テハ、矢ノ飛去ルカ如キヲ以テ名付ケラレタルモノナラン、蓋シ英語ノ

「シレザット」ノナリ、

(第三)鈔。亦紙幣ノ一名ナリ、金ノ交鈔、元ノ中統寶鈔、明ノ大明寶鈔ノ如シ、

(第四)楮。字書ニ木名、皮可爲紙トアリ、蓋シ(Broussonetia papyrifera)ノナナルベシ、元來木名ナレトモ、其皮ヲ

以テ幣ヲ作ルカ故ニ、直チニ紙幣ノ稱トス、楮ハ楮輕而直多、又ハ楮價、損折ナドイフカ如シ、

(第五)牒。字書ニ札也トアリ、又書版曰牒トモアリ、亦紙幣ノナリ用フ、

(第六)簡。是レハ牒ト同義ナルベケレハ畧ス、

(第七)券。字書ニ相約束續繕爲限也、トアリ又タ以木牘爲要約之書トモアリ、故ニ券ハ元ト契約ノ意ヲ含

メルモノナルベシ、

(第八)交子。邦語ニ譯セハ、爲換切手トモ云フベキモノナリ、交ハ相往來貌トアレハ、交換ノ義ナルベシ、

(第九)會子。是ハ証書ナリ、

(第十)關子。是ハ邊塞ニ屯駐セル、軍士ニ供給スルタメニ發行セシ紙幣ナリ、蓋シ其最初ノ目的ハ、軍事ノ

爲メニ入用ナル負債ヲ償還スルニアルナリ、

抑モ貿易未タ繁盛ナラサルキハ、物品ヲ交換スルニ正貨ヲ以テスルモ、尙ホ足レリトス、然リ而ノ社會漸ク開、百工興起シ、貿易繁昌スルキハ、人皆ナ正貨ヲ用フルノ不便ナルヲ覺エ、遂ニ自ラ之レニ代フルニ、代用幣ヲ以テス蓋シ、代用幣ハ強チ紙幣ニ非サルモ亦可ナリ、故ニ未タ紙ノ發明アラサリシ時代ニハ、皮ニ、錫ニ、其他種々ノ物ヲ用井タリシカ、其發明アリテヨリハ、其尤モ便益アルヲ以テ、人皆ナ之ヲ用井、遂ニ周ク天下ニ流行スルニ至レルナリ、夫レ紙幣ノ要タル、先ツ運輸ノ勞ヲ省キ、又タ資本ヲ節スルヲ得ベシ、是レ萬國紙幣起原ノ大畧ナリ、例之ヘバ歐洲銀行紙幣ノ如キ、凡ソ七百年前伊太里ノ貯蓄銀行ヨリ之レヲ發セルニ胚胎ス、當時流通セシ貨幣ニ數種アリテ、商估之レヲ收受スル毎ニ、其品位重量ヲ計較セサルヘカラス、爲メニ貴重ノ光陰ヲ浪費ス、是ヲ以テ商估相集テ銀行ヲ設立シ、正貨ヲ茲ニ貯蓄シテ、紙幣ヲ發行セリ蓋シ代用幣ノ發行ヲ獎勵スルモノハ、正貨ノ量ノ重大ナルニ職由セズンハアラス、北米聯邦ヴイルジニヤ洲ニ於テ、煙草ヲ以テ

錢貨トセシキニ、之ヲ貯蓄シテ切手<sup>ヒル</sup>ヲ發行シタルモ、亦タ  
 煙草ノ實際貿易取引上ニ便ナラサルニ因ルナリ、又方今  
 英吉利ノ如キ、五洲ノ富盛ヲ網羅シ、貿易取引盛大ナル處  
 ニテハ、金貨スラ猶ホ重キヲ覺ユザ<sup>エ</sup>ヴ<sup>ン</sup>氏曰ク、方今倫  
 敦銀行ニテ日々取引スル金額ハ、二億圓餘ナリ、此額金貨  
 ニスレハ、百五十七噸ニ當リ、銀貨ニスレハ、二千五百噸ニ  
 當ルト、實ニ夥シキコトナリ、又タ正貨ニ代フルニ紙幣ヲ  
 以テスレハ、資本ヲ節減スルヲ得ベシ、例之ヘハ西<sup>ウエスト、イン</sup>印  
 度某島<sup>デース</sup>ノ奉行カ、新ニ市場ヲ築カントセシキ、一ポンドノ  
 紙幣四千枚ヲ發行シタルカ如キ是レナリ、  
 今宋史ヲ按スルニ、同一ノ原因ヨリ紙幣ノ發行アリ  
 シモノ、如シ、當時支那ノ西部ニ、鐵錢融通セリ、其重クノ  
 貿易ニ不便ナルヲ、ライカ<sup>ライカ</sup>ルガスカ鑄造シタル、スバルタ  
 ノ鐵錢ニ讓ラサルナリ、於是乎交子ノ發行アリ、蜀人以鐵  
 錢重私爲券謂之交子。以便貿易。富人十六戶主之ト文  
 獻通考ニ見エタリ、後チ富人ノ賞、稍衰ヘテ其負フ所ヲ償  
 却スルヲ能ハサルニ至レリ、是レヨリ爭鬪數々起テ、大ニ  
 法廷ヲ煩ハス、蜀ノ大守冠城之ヲ禁止セシヲ乞ヒタリ

モ、轉運使薛田ノ議ニ從ヒ、之ヲ廢スルキハ、貿易ニ便ナラ  
 ストテ、交子務ヲ益州ニ置キ、固ク人民ノ私造ヲ禁シタリ、  
 宋ノ太祖ハ五代藩鎮ノ苛征ニ懲リテ、商征及ヒ麴鹽酒禁  
 ヲ寬フセシ如キ人ナレハ、專ラ民ノ便益ヲ謀リ、唐ノ飛錢  
 ノ故事ヲ取り、民ヲノ其錢貨ヲ京師ニ輸送シ、諸州ニ於テ  
 紙幣ト便換セシム、其法一緡二十錢ノ增准<sup>プレミアム</sup>ヲ課ス、同帝ノ  
 開寶三年、我カ 圓融天皇ノ天祿元年ノ頃ナルベシ、便錢  
 務ヲ置キ、民其錢ヲ務ニ入ル、キハ即チ之レヲ左藏庫ニ  
 致タシ左藏庫ニ於テ券ヲ給付ス、凡ソ民ノ券ヲ齎シテ、諸  
 州ニ至ルアラハ、其當日給付シテ、敢テ住滯スルヲ得ス  
 若シ之ニ違フモノハ、嚴刑ニ處セラル、是レニ由テ諸州ニ  
 通融シテ、敢テ停滯セズ、太宗ノ至道中、便錢ノ通融スルモ  
 ノ、百七十餘萬貫ニ至レリト云フ、是時ニ當テ太抵三歲ヲ  
 以テ兌換ノ一期トシ、一期ヲ稱シテ一界ト云フ、原鍾致格  
 ニ、於是設<sup>ニ</sup>劑劑之法。一交一緡。以三年爲一界而換之。  
 始祥符之辛亥<sup>ニ</sup>真宗ノ世至<sup>ニ</sup>熙寧之丙辰<sup>ニ</sup>神宗之世六十五  
 年二十三界。トアリ、按スルニ當時民錢少ク定期ニ至ルモ  
 之レヲ務ニ致タスモノナシ、是ニ於テカ政府漸ク法ヲ破

リ、邊塞屯兵ノ巨費ヲ償ハシカ爲メ、司務ナル本錢ヲ借用セリ、雖至巧有不能易ト、評シタルハ明言ト云フ可キナリ、

予今宋朝紙幣史ヲ叙スルニ、題目ヲ分彙スルコト左ノ如シ、

第一 交子

附四川錢引

第二 會子

第三 准交

第四 湖會

第一 交子

附四川錢引

仁宗皇帝天聖中、交子ノ額ヲ百二十五萬六千三百四十緡ト定メタリ、神宗皇帝熙寧二年、交子務ヲ潞州ニ置ク、蓋シ當時河東ニ鐵錢通融シテ、民皆ナ運輸ノ勞費ニ苦ミタレハナリ、熙寧二年ハ、我カ 後三條天皇即位ノ年ナリ、明年漕司奏ス交子鑿鹽ノ通融ヲ妨害スト、遂ニ潞州ノ交子務ヲ罷ム、五年交子ノ第二十二界將サニ至ラントス、而シテ第二十三界ノ給用已ニ多シ、依テ更ラニ二十五界ナルモノ、百二十五萬ヲ造リ、以テ之ヲ償フノ詔アリタリ、交子之有兩界自此始トアリ、哲宗皇帝紹聖元年、成都路漕司同路用

ニ乏シキヲ以テ、交子ヲ印造セシムルヲ請ヘリ、依テ一界十五萬緡ヲ増造ス、而シテ百二十五萬六千三百四十緡ハ、當時尙ホ流通シタルハ、緡幣ノ額合セテ百四十萬六千三百四十緡ノ多キニ至レリ、是レヨリシテ政府知ラズ識ラズ、財政困難ノ境ニ踏ミ入ラントスルナリ、徽宗皇帝ノ大觀元年、(鳥羽天皇即位ノ元年)四川交子ヲ改メテ錢引トナス、是時ニ當リ朝廷滎廓西寧ヲ取り、兵費ヲ償却スル皆ナ錢引ノ法ニ藉ル、天聖ニ比スレハ二十倍ヲ逾ヘ、而シテ其價愈々損折ス、陝西河東ヘノ詔ニ依レハ引ノ直ハ五千乃至七千ナルニ、成都纔ニ二百乃至三百ナリ、又々同詔ニヨリ、民間貿易十千以上正貨ト錢引トヲ半用セシム、言者謂ラク正貨ト紙幣トヲ雜ユレハ、價格ノ増損ヲ計較シ難シト、是レ下落シタル紙幣ヲ、強テ流通セシメン爲メノ壓制ノ政畧ニシテ、理財學者ノ目ヲ以テ之ヲ見レハ、實ニ笑フ可キノ至リナリ、時ニ威州知事張特上奏シテ曰ク、錢引元價一貫。今每道止直一百文。蓋必官司收受無難。自然民心不疑。便可遞相轉易。流通增長價例。乞先自上下請給。不支見錢。並支錢引。或量支見錢一二分。云々朝廷之ニ從フ、然

レ此當時錢引ノ價一緡僅ニ正貨ノ十二當ル、即チ百分ノ一ナリ、嗚呼初メハ必本錢ヲ貯蓄シテ、新舊相因リシモ、大觀ノ頃ニ至リテハ、本錢ヲ備ヘス引價大ニ損折スルニ至ル、是レ増造無藝ナルニ職由セスンハアラス、豈ニ深ク戒メサル可ケンヤ、(文獻通考ニ曰ク錢引。崇寧間。行於京東西淮南京師諸路。惟福建江浙湖廣不行。ト)

是時ニ當リテ鞏鞏國中ニ侵入シ、變亂已ムキナク、相尋テ宜和靖康ノ亂アリ、高宗位ニ即キ、父兄ヲ窮厄ノ中ニ救ハント欲シ、益ス兵ヲ集ムト雖モ、奈何セン國ハ總テ是レ紙幣海ニシテ、兌換ノ策畧全ク盡キ、困難ノ狀言フ可カラサルニ至リシヲ、高宗熙寧三年六月ノ詔ニ曰ク、自祖宗以來。先計引數封樁本錢。常停重錢。以權經券。故法不弊。中間印給泛料數多。即將本錢侵用。故引法日壞。況自張浚開宣府。趙開爲總餉。以供糴本以給軍需。增引日多。莫能禁止。ト高宗ノ嘆亦タ宜ナル哉、(熙寧三年ハ我カ 崇徳天皇長承二年ニ當レリ)

初メ交子ノ蜀地ニ於テ發行セラレタルキハ、兩界アリテ每界百二十餘萬アリ、後チ三界通行アリシキハ、三千七百

八十餘萬貫アリ、續テ紹興ノ末ニ至リテハ、四千百餘萬貫アリ、而シテ正貨僅ニ七十餘萬貫アルノミ、又タ寧宗皇帝カ嘉泰ノ末ニ至リテハ、遂ニ五千三百萬貫ノ多キニ至レリ、當時每緡鐵錢四百ニ換フ、政府之ヲ兌換セント欲メ、之レカ謀計ヲ講スルニ當リ、胸臣陳咸、金銀度牒一千三百萬ヲ出シテ、半界ヲ收回ス、而シテ期限已ニ至リテ、受給ノ際、官吏竊ヲ爲セシニ因リ、人民皆ナ嗟怨セサルハナシ、一引ノ價遂ニ止タ百錢ナルニ至レリ、政府乃チ布令シテ曰ク、曩ニ收兌セシ一千三百萬ヲ除クノ外ハ、三界ノモノ皆ナ舊時ノ如ク通行スルヲ得ベシト、コヽニ於テ民心大ニ定マリ、一引ノ價五百錢ニ至ル、然リ而シテ關外ニ至リテハ、其價僅ニ銅錢ノ百七十ニ敵スル而已、嘉定三年(我カ 順徳天皇即位ノ元年ナルベシ)舊引ヲ收兌スルノ一回、而シテ引ノ價遂ニ復タ故ノ如シ、

(未完)

批評

○クック氏ノ演說ヲ評ス

鈎玄堂主人

吾輩ハ去ル三日明治會堂ニ於テ、米人ジユセフ、クック氏ガ



演説ヲ聽キシニ、其意、日本人ヲシテ、耶蘇教ヲ信セシメン  
トスルニアリト見エ、力ヲ極メテ、唯物論ヲ駁セシカド、吾  
輩ハ毫モクック氏ノ論ニ服スル能ハサル理由アルヲ以テ、  
聊カ此ニ辯明スル所アラントス、吾輩ハクック氏ハ有  
名ノ辯者ニシテ、且ツ學識アル人ト聞キ傳ヘタルヲ以テ、  
他人ニ先テ、明治會堂ニ行キシニ、傍聽人次第ニ増加シ、幾  
ト千人ニ近カラントス、コレヨリクック氏演説場ニ登リ死  
ハ萬事ヲ終ハルカト云フ問題ニ就ヒテ精神ノ不滅ナル  
ヲ論辨スルヲ二時間餘ナリ、其終リニ至リテ、其聲ノ益々  
大ナリシハ吾輩實ニ感服セリ、儲氏カ演説ノ初メニ我  
天皇陛下ノ詔ヲ舉ケテ、我天皇陛下ノ唯物論者ニアラサ  
ルヲ證セシハ吾輩ヲシテ、捧腹絶倒ニ堪ヘサラシメタリ、  
然レモ此事ハ姑ク之ヲ置キ、其唯物論ヲ駁セシハ、絶エテ  
哲學ヲ知ラサル者ノ暗ニ空中ヲ摸索スルカ如キ論法ナ  
リキ、抑ククック氏カ駁スル所ノ唯物論ハ、何人ノ主張スル  
所ナルヤ、チンデル、ヘツケル諸氏ハ決シテ氏ガ妄想スル  
カ如キ怪誕ナル唯物論者ニアラス然ラハ氏カ駁スル所  
ノ唯物論ハ何人ノ主張スル所ナリヤ、且ツ又クック氏カ

スペンサー氏ヲ以テ唯物論者トナスハ、吾輩ヲシテクック  
氏ハ、スペンサー氏ノ書ヲ讀ミシヤ否ヤヲ疑ハシメタリ、  
何ントナレハ、スペンサー氏ハ決シテ唯物論者ニアラ  
サレハナリ、氏又ドクトル、モールス氏ヲ非笑シ、モールス  
氏ノ爲メニ日本人ガ唯物論者ニナリシカ如ク言ヘリ、然  
レモモールス氏ハ生物學者ニテ、哲學上ノ事ハ、深ク知ラ  
ス、故ヲ以テ、哲學上ノ事、未ダ曾テ言ハサリキ、假令ヒ  
モールス氏カ哲學上ノ事ヲ深ク知リテ日本人ヲ煽動スル  
トモ、若シ其事カ道理ニ合ハサレハ、日本人ハ決シテ之カ  
爲メニ動かサレサルヘキナリ、又クック氏ハ元形質中ノ  
核ノミヲ指シテ之ヲ元形質トシ、其他ヲ成形質トセ  
リ、然レドモ是レ恐クハクック氏ノ説ニアラサラン、初メ  
クック氏カ諸圖ヲ掛ケシキ、其模様ノビール氏ノ諸圖ニ似  
タルヲ以テ、定メテビール氏ノ説ニ據リテ説カル、ナラ  
ント思ヒ、俟チ居タルニ、果シテ然ルコトハ然リシガ、少シク  
其説カ違テ聞ヘタリ、蓋シビール氏ハ核ノ外ヲ指シテ之  
ヲ成形質トスルニアラス、元形質ノ外面ノ變化シタル所  
ノミヲ成形質トスルナリ、然ルニクック氏ハ核ノ外ヲ概

シテ一切之ヲ成形質トス、且ツクック氏ハ牡蠣ノ壳ヲ擧ケテ之ヲ成形質ノ的例トス、夫レ牡蠣ノ壳ハ滲出<sup>シクリン</sup>ヨリ成ルモノニテ細包<sup>セル</sup>ノ變化シテ成形質トナルトハ、大ニ異ナリ、然ルニクック氏ハ二種ノ事實ヲ混同シテ論セラレタリ、豈之ヲ妄説ト稱セサルヲ得ンヤ又クック氏ハペイン、スペインサ―諸氏ノ學ヲ以テ淺薄ナリト言ヘド、吾輩ハクック氏カ演説ノ極メテ淺薄ナルヲ憫笑ス、然ルニ横濱ガセツト「記者ハ、口ヲ極メテ讚賞シ、又當日ノ演説ヲ以テ、クック氏ノ演説中最モ佳ナルモノトス、果シテ然ラハクック氏ノ力量ハ猶ホ以テ知ルヘキナリ、又クック氏ハ頻リニ獨逸哲學ノ高尙ナルヲ言ヒシガ、コレハ誰レモ知ルヲニテ希圖<sup>メツテ</sup>シキコアラズ、反リテクック氏ノ引用セシ人ヲ擧クレンハ、第二流以下ノ人ニシテカント、ヘーゲル、フヒヒテ諸氏ノ如キハ、更ニ引用セス、唯、ライプニッツ氏一人ヲ稱セシカド、ライプニッツ氏ノ「モナドロギ」ハ怪誕ナル妄想ニシテ、今日ニアリテハ、取ルニ足ラサルモノナリ、クック氏ハ又スペインサ―氏ノ生命ノ定解ヲ擧ケテ、徒ニ之ヲ非トシ、其非ナル所以ヲ言ハス、是レ議論ニアラス、是レ唯、譏

謗ノミ、又クック氏ハマックスウエル、テ―ト諸氏ノ數學ニ精ハシキヲ歎賞シチンデール氏カ數學ニ精ハシカラサルヲ姍笑セリ、若シ精神ノ不滅ナルヲカ數學ニヨリテ證スヘキモノナラハ、數學ハ恐ロシキモノナラスヤ、然ラサレハ何故ニチンデール氏カ數學ニ精ハシカラサルヲ毀ルヤ、クック氏又スペインサ―氏ノ獨逸語ヲ解セサルヲ非笑スレト、クック氏ハ多ク獨逸ノ哲學書ヲ讀ミシヤ、否ヤ、實ニ疑フヘシ、然ルニクック氏ハ深ク獨逸哲學ニ通スルモノノ如ク、大言シ、絶テ自カラ恥ツル所ナケレト、吾輩ハクック氏ノ自カラ恥チサルヲ見テ、反リテ手ニ汗ヲ握レリ、クック氏ハ又演説ノ終リニ臨ミ、クエリオスサザタリオス等ノ星ヲ指シテ、天ヲ仰キ來聽人ヲシテ、未來ノ世界ヲ知ラシメントセシカド、星カ未來ノ世界ナルヤ否ヤハ未タ知ルヘカラス、之ヲ要スルニ、クック氏ノ演説ハ情緒多クシテ道理少ク、爲メニ吾輩ヲシテ耶蘇教徒ニ化セシムルニ足ルヘキモノニアラサルナリ、

雜 錄

## ○巖垣月洲傳

杉浦正臣撰

岩垣先生真豪傑之士哉。其學以經濟實踐爲主。其行已也。挺然中立。不徼名利於世。是以窺其抱者或寡云。予嘗遊京師。親炙於先生。知其非腐儒也。乃作之傳曰。先生京師人也。名龜。通稱六藏。號月洲。本姓岡田。後冒岩垣氏。父邦彥。受業岩垣龍溪。遵古堂。爲其高足。先生幼學于家庭。孜孜不倦。長而恭勤。博涉典籍。才識過人。及龍溪子松苗沒。同社遂推先生。爲遵古堂督學。先生雖受家學。然不肯守株。其經說史論。屢出人意表。而尤切於事情。及下帷。晝講宵讀。常以身率先弟子。未嘗督責也。時有塾生失行者。即日逐之。都講請先生垂戒不悛。而後逐之。先生曰。吾平生講聖經。莫一非戒約焉。彼既不畏大聖。何有於六藏哉。戒之何益。遂弗聽。天保中。朝廷詔建學習所。撰實學之儒。充教授。先生亦與焉。固辭不允。不得已拜命。無幾。謝病辭職。自是之後。不肯復仕官。當嘉永安政之間。外交事起。天下恟々。或問先生以和戰得失。先生曰。苟我國富而兵疆。則和與戰唯我所欲爲。否則和戰皆足以誤國矣。我邦昇平二百餘年。國窮而兵弱。今日之務。莫急於講富疆之術焉。何暇論和戰得失乎。時

刺客公行。或聞先生之言。而怒。陰圖狙擊之。會其徒有識先生者止之。因得免焉。後病眼喪明。而其講學如故。常使弟子朗讀。隨讀隨講。未嘗一日廢課也。明治六年九月四日病沒。所著月洲遺稿三卷。已行于世。其餘有西征快心編一卷。科舉志畧一卷。骨董集及詩文稿若干卷。並藏於家。先生爲人清癯多病。常節飲食。慎起居。未嘗過其度。其接人。言語恂恂。或不辨其爲儒士也。嘗聽弟子輪講。諸說紛紜。難疑不決。先生曰。諸說各有其用。不必歸一。譬如醫之用藥。一種或治數症。若執一不通。是庸醫耳。苟益於行。何必問說之同異乎。因語曰。子等志於道。須先定終身之業。則庶幾免乎迂濶矣。若夫身無常業。而妄論國政。動輒窮困狼狽。怨天尤人。其不爲世人所嗤者。幾希矣。可不思哉。嘗講論語。至樊遲稼圃章。則曰。蓋樊遲嘗見孔子從事於稼圃。故請益如此。如使孔子舌耕文稼。類于今日之儒。則未必發此言。由是觀之。孔家之資業可知而已。談及孟子則曰。梁惠王開口問利國之計。可見當時諸侯猶知學問事功非二途矣。方今諸侯之於儒。則溜流視之耳。孰能一見問時務耶。其見解持論。皆此類也。先生於詩文。別出機軸。而不甚彫琢。要唯敘懷記實而

已。如筆札。尤適美灑脫。頗有高致。與文詩。皆足以成一家矣。而不屑以文墨稱也。又好泰西究理之說。時新宮涼廷。廣瀨元恭。並以蘭學著。先生與之交。因得達其旨。先生雖無田產之業。然家素有房租之入。又儉勤治家。其不求聞達。而得優遊卒歲者。未必不基於此云。一贊曰。先生豈管葛之流耶。何其氣象之酷相似也。嗟乎。學術之離事功也久矣。未學腐儒。商談性命。徒玩詞章。不解經濟實踐爲何事。竟使大聖手段霧消煙滅。可勝慨哉。先生以不世出之資。首唱實學。其有功於世。誠非淺鮮也。若使先生任用於時。則其施設豈出於管葛之下耶。而世無具眼。天奪其明。惜夫。

○西洋にてハ戰の時、慷慨激烈なる歌と謠ひて、士氣と勵まるとあり、即ち佛人の革命の時「マルセル」と云へる最と激烈なる歌と謠ひて進撃し、普佛戦争の時普人の「ウオッチメン、オン、ゼ、ライオン」と云へる歌と謠て愛國心と勵ませし如き、皆此類あり、左の抜刀隊の詩ハ即ち此例に倣ひたるものあり、

東京大學文學部長

山外山正一

○抜刀隊

我ハ官軍我敵ハ  
敵の大將たる者ハ  
之に従ふ兵ハ  
鬼神に恥ぬ勇あるも  
起し、者ハ昔より  
敵の亡ぶるそれまでハ  
玉ちる劔抜き連れて

天地容れざる朝敵ぞ  
古今無雙の英雄ぞ  
共に慄悍決死の士  
天の許さぬ叛逆と  
榮へし、めしあらざるぞ  
進めや進めもるともに  
死ぬる覺悟で進むべし

皇國の風と武士の

其身とまもる靈の

維新このうら廢れざる  
又世に出つる身の譽  
刃の下に死むべきぞ  
死むべき時ハ今あるぞ  
敵の亡ぶるそれまでハ  
玉ちる劔抜き連れて

日本刀の今更に  
敵も身方も諸共に  
大和魂あるものハ  
人に後れて恥うくか  
進めや進めもるともに  
死ぬる覺悟で進むべし

前と望めバ劔あり

右も左りも皆劔

劍の山に登るの

此世に於てまのあさり

我身のあせる罪業と

賊と征伐するがため

敵の亡ぶるそれまで

玉ちる劍抜き連れて

劍の光ひらめく

四方に打出と砲聲の

敵の刃に伏む者や

絶えて墓かく失する身の

其血の流れ川とあそ

敵の亡ぶるそれまで

玉ちる劍抜き連れて

彈丸雨飛の間に

進む我身の野嵐に

墓かき最後とくるとも

未來の事と聞きつるに

劍の山に登るのも

滅ぶ爲にあらざして

劍の山もあんのその

進めや進めもるともに

死ぬる覺悟で進むべし

雲間に見ゆる稻妻ぞ

天に轟く雷ぞ

丸に碎けて玉の緒の

屍の積みて山とあし

死地に入るのも君がため

進めや進めもるともに

死ぬる覺悟で進むべし

二つあき身と惜まるとに

吹られて消ゆる白露の

忠義の爲に死する身の

死して甲斐あるものあらば

我と思はん人さちの

敵の亡ぶるそれまで

玉ちる劍抜き連れて

我今こゝに死ぬるの

捨つべきもの命あり

忠義の爲に捨てし身の

永く傳へて残らん

義もあき犬と云はるゝか

敵の亡ぶるそれまで

玉ちる劍抜き連れて

死ぬるも更に怨みし

一步も後へ引くかうれ

進めや進めもるともに

死ぬる覺悟で進むべし

君のさめあり國のさめ

假令ひ屍の朽つるとも

名に芳しく後の世に

武士と生れし甲斐もかく

卑怯者とそしられか

進めや進めもるともに

死ぬる覺悟で進むべし

井上巽軒曰。慷慨激烈。使兵士歌之。勇氣必百倍矣。

○月洲先生詩鈔（前號ノ續）

觀浴佛

京俗竿頭縛躑躅花。曰八日花。

釋雛已落地。竿花猶供天。雖服五香藥。遺毒千年傳。

雙手指天地。自誇我獨尊。請看誕生日。已開妄誕門。

僧家慣浴兒。不獨佛生日。羨他無哭聲。生子當如佛。

贈取浴兒錢。銅像借光寵。此兒真再生。天下無僧種。

井上巽軒曰。罵詈一番。僧徒應吐舌。

殘畫

敗素何何代。江山沒暗塵。補天裝背露。縮地幅邊皴。蟬蝕穿雲洞。蛛絲網柳津。不知誰手筆。誤問畫中人。

與中島生。約泛湖之遊。屢期而雨。不果。

琵琶湖與鳳皇城。只隔東山一翠屏。擬伴酒仙弄烟水。雨師風伯每沮行。出門寸步猶如此。何況平生千里志。

寄書

○書ハ美術ナラス

小山正太郎 演述

昨明治十四年内國勸業博覽會ニ於テ、書ヲ美術ノ區域ニ入レラレ卓見博識ナル審査官等、一人ノ異論ヲ稱フル者無ク、次テ有名ナル龍池會ニ於テモ、亦以テ美術ト爲シ、觀古美術會ヲ開ク毎ニ、常ニ書ヲ其區域ニ入レ、剩ヘ工藝叢談ト題スル雜誌ニ載セテ曰ク、本邦ノ書ニ精美高雅實ニ人ノ心目ヲ慰スルニ足り、固ヨリ歐州蟹行ノ字ト同日ニシテ論ス可カラズ、故ニ我輩ハ新ニ書ヲ以テ製形上ノ

美術ニ加フト、以テ世上ニ公布セリ、而シテ世間夥多ノ學士、論者一人ノ之ヲ非難スル者無ク、多クノ新聞記者等モ亦一言之ニ及フ無シ、夫レ博覽會ハ政府ノ建ル所ニシテ、最モ識者ノ集ル所ナリ、龍池會ハ我邦ニ於テ最モ有識、最モ有名ニシテ、朝野望ミヲ屬スルノ會ナリ、而シテ學士、論者、新聞記者ハ世ノ誤謬ヲ匡シ、文運ヲ補導スルノ人ナリ、此三者已ニ怪マサレハ、誰カ又之ヲ非難スル者アラフヤ、是レヨリ後、世上靡然トシテ其說ニ傾キ、今日ニ至テハ天下一人ノ之ヲ怪ム者ナキニ至レリ、是レ實ニ諸君ノ知ラル、所ナリ、然ルニ予獨リ私カニ以爲ク、是レ大ニ過レリト、因テ今夕茲ニ吾カ過レリト爲ス所以ヲ、述ヘ、以テ諸君ニ、質サント欲ス、前ニ述フル如ク、目下世上ニ於テハ一般ニ美術ナリト稱スレヒ、其稱スル所ハ皆理由ナキ饒言ニ過キス、而シテ又其他種々索搜スレヒ、更ニ美術ナル理由ヲ發見セサルナリ、因テ先ツ始メニ世上ノ說ノ許ス可カラサルヲ論シ、次ニ分解スルモ美術ト爲スヘキ理由無キヲ述ヘ、次ニ美術トシテ勸獎スルノ結果如何ヲ論シ、以テ局ヲ結ハントス、諸

君先ツコレヲ諒セヨ、

書ハ美術ナリト稱スル人ノ説ニ曰ク、本邦ノ書ハ歐洲蟹行文ト異ナリ、美術ト云フヘシト、是レ誤謬ノ第一ナルモノ也、夫レ書ハ固ト言語ノ符號ニシテ、他ニ作用アルニ非ス、上古ノ世、人民音聲ニ因テ言語ヲ作り、互ニ意ヲ通セシモ、言語ハ一場ニ止マリ、遠隔ニ達スル能ハス、於此已ムヲ得ス之カ符號ヲ作テ、之ヲ久遠ニ達ス、書ハ即チ此符號ナリ、故ニ其主旨タル唯タ意ヲ通スルニ在ルノミ、書ニシテ誤リ無ク意ヲ通スルヲ得ハ、則チ書ノ職分畢レリ、又他ヲ問フヲ要セサルナリ然ハ則チ蟹行ト云ヒ、鳥跡ト云フ也、其主旨職分等ニ至テハ、毫末モ異ナルヲナキ也、唯タ異ナル所ハ形ノミ而シ、此形ハ固ト創造者カ一時ノ意匠ヨリ作ル所ニシテ、如何ニ作ル也他ニ影響アルモノニアラス、實ニ末ノ末ナルモノナリ、故ニ本來ノ主旨、職分等已ニ同シケレハ、縦ヒ末ノ末ナル形ニ少違アリ也、ソレカ爲メニ一ハ美術ニシテ、一ハ美術ナラスト云フカ如キ、大區別ノ其間ニ生スルノ理ハ萬々ナキ所ナリ、譬ヘハ猶ホ人ノコトシ、我邦人ハ頭髮黒ク、頬骨高ク、歐洲人ノ碧眼紅

毛ト、其形小異アリト雖モ、ソレカ爲メ人類中ヨリ擢テ、獨リ神仙中ニ入レヘシト云フカ如キ區別ハ決シテ附ス可カラサルナリ、主旨功用等ノ如何ヲ問ハス、唯タ末ノ末ナル形ニ由テ、區別ヲ立ツルハ、是レ嘉永年代ニ黒船トサユ云ヘハ、商船ニモアレ、飛脚船ニモアレ、其形ノ我船ト異ナルカ爲メニ、一概ニ軍艦ト思ヒシト一般ノ見ナリ、又曰ク我邦ノ書ハ趣味アルニ由テ美術ナリト、是レ亦妄言ノ甚キモノナリ、凡字内ノ萬物一トシテ多少趣味アラサルハ無シ、若シ趣味アルニ由テ美術ナリトセハ、吾人四面ノ諸物一トシテ美術ナラサルハ無シ、復タ美術ト稱スル區別ヲ要セサルナク、例ヘハ此卓子ノ如キ、此燭臺ノ如キ、此水指ノ如キ此「ユツプ」ノ如キ、皆多少趣味アルモノナリ、豈ニ之ヲ盡ク美術ト稱スヘケンヤ、且夫レ諸君ノ知ラル、如ク、蟹行文ニモ無量ノ趣味アリ、鶯筆ヲ以テ疾書セシハ我草書ト同ク、巧ミニ曲折セシ花文字ハ、我篆書ト同ク、其趣味彼是相異ナラサルナリ、故ニ若シ趣味アルニ由テ美術ナリトセハ、蟹行文ヲ第一ニ美術トセサルヘカラス、

又曰ク本邦ノ書ハ人ノ心目ヲ慰メ、人々之ヲ愛翫スルニ因テ美術ナリト、是レ亦知ラサルモノ、言ナリ、本邦人ノ書ヲ愛翫スルヤ、眞ニ書ヲ愛翫スルカ如クナレトモ、詳ニ之ヲ究ムレハ、實ハ書ノミヲ愛スルニ非ルナリ、故ニ其愛翫スル所以ヲ分解スレハ、則チ人々同シカラス、或ハ其語句ノ己ノ意ニ適スルヨリノ之ヲ愛シ、(扁額及ヒ聯等ハ最モ然リ)或ハ其人ヲ慕フノ餘リ、手蹟ノ存スル所トシテ之ヲ愛シ、(文山東坡象山南洲等ノ書ヲ愛スルノ類)或ハ年數ヲ歴シ所ヨリ、古物トシテ之ヲ愛シ、(古代ノ書類ヲ愛スル類)或ハ世上ニ稀ニシテ得難キ所ヨリ、奇品トシテ之ヲ愛シ、(辨慶ノ請取、清正ノ書翰ノ類)或ハ慣習ニ由テ之ヲ愛シ、(趣味ヲ解セサル人モ、向ホ坐間ニ掛クル類)或ハ雷同シテ之ヲ愛シ、(時々流行ノ書ヲ好ム類)或ハ就テ學ハシ爲メ摸範トシテ之ヲ愛ス(書ヲ嗜ム人ノ古帖法ヲ愛スルノ類)ルノ類、尙ホ細ニ區別スレハ枚擧ニ暇アラズ、人々愛スル所ノ同シカラサル如此シ、由是觀之ハ、人々書ヲ愛スルト雖モ、眞ニ書ヲ愛スルニ非スシテ、愛スル所多クハ他ニ在ルナリ、故ニ書ハ唯タ他ヲ愛スルノ媒始タルニ過

キスト云フモ或ハ可ナルノミ、今若シ卑ムヘキ一漢アリテ、嫌フヘキ一語ヲ書セハ、其書巧ミナリトモ、恐クハ坐間ニ掛ケテ愛翫スル者無カルヘシ、之ニ反シテ數百年前ノ書、若クハ豪傑ノ書ノ如キハ、其巧拙ヲ問ハズ、一紙一牋人爭テ購求スルニ非スヤ、亦以テ邦人ノ愛スル所、多クハ書ニ非スシテ他ニアルヲ證明スルニ足ル、論者或ハ曰フ書家若クハ平時書ヲ嗜ムノ人、能書ヲ見ル時ハ眞ニ心目ヲ慰メ、己モ亦之ヲ愛スル、是レ固ヨリ然リ、然レモ是レ己ヲ利スルノ點ヨリ、心ヲ慰ムル者ニシテ決シテ、美術上ノ歡喜ヨリ愛スル者ニ非ルナリ、故ニ古物家ノ瓦片ヲ見テ心ヲ慰ムルト同様ニシテ、是レノミヲ以テ決シテ一般ニ人ニ心ヲ慰メ、人々之ヲ愛翫ストハ云フ可カラサルナリ、且假ニ人ニ心ヲ慰メ、人々之ヲ愛翫スルト爲スモ、尙ホ之ヲ以テ美術ナリトハ云フ能ハズ、凡ソ物ノ精ナルモノ、巧ナルモノハ、皆人目ヲ慰メ人モ亦之ヲ愛翫スルモノナリ、獨リ書而已ニ非ルナリ、例ヘハ骨董、盆栽ノ類ノ如キ、皆人目ヲ慰メ、人ノ愛翫スル所ナリ、豈ニ之ヲ盡ク美術ノ區域ニ入ルヘケンヤ、



又曰ク本邦ノ書ハ房室ノ裝飾ニ供スル、歐米ニ於テ書ヲ用ユルカ如シ、因テ美術ナリト、是レ亦論スル迄モ無キ妄ノ妄ナルモノナリ。例ヘハ敷物ノ如キ、壁色ノ如キ、皆室内ノ裝飾ニ供スルモノナリ、豈ニ之ヲ盡ク美術ナリト云フヘケンヤ、

又曰ク本邦ノ書ハ古ヨリ書畫同体ト稱シ、畫ハ書ヲ助ケ、書ハ畫ヲ助ケ固ヨリ同根同種ナリ、故ニ畫ヲ美術トセハ、書モ亦美術ナリト、是レ必ス文人畫ノ題字ヲ以テ、畫ノ位置ヲ助ケルヨリ起リシ説ナルヘシ、實ニ笑フヘキノ至リナリ、往古倉頡ノ創メテ言語ノ符號ヲ作ルニ當テハ、多少畫力ヲ借り、萬物ノ形ニ象リテ作りシナルヘシト雖モ、已ニ作りシ以上ハ形ニ由テ其意ヲ覺ルニ非ス、唯タ符號トシテ解スル而已、況ンヤ爾來數ク變更セシニ於テオヤ、若シ主旨、功用、名稱等ノ大ニ異ナル、今日ニ於テ猶ホ同種ナリト云ハ、是レ木綿ヲ以テ衣ヲ製シ、衣服ハ植物ナリト云類ナリ、

又曰ク本邦ノ書ハ、人心ヲ感動スルニ因テ美術ナリト云レ亦タ笑フヘキノ言ナリ、今若シ落花遊絲白日靜、鳴鳩乳

燕青春深、ト書スル一書幅アラハ、之ニ對スル者、或ハ春晚暖日ノ想ヒヲ爲スヘシ、其人心ヲ感動スルヲ無シトハ云フヘカラス。然レモ其吾人ヲ感動スル者ハ何ナリヤト尋ヌレハ、則詩句ノ力ニシテ、書ノ力ニ非ルナリ。故ニ如何ニ巧ミナル書ナリモ、不通ノ誤ヲ記セハ、人心ヲ感スル無ク、拙キ書ナリモ、名文、名句ヲ記セハ、人心ヲ感スルヤ必セリ、又一體ノ書風ヲ以テ、種々ノ詩文ヲ記スルハ、其詩文ニ隨テ讀者ノ感情ヲ異ニスヘシ。此ニ由リ之ヲ觀レハ、人心ヲ感動スルハ詩文ニシテ、書ニ非ルヤ明カナリ。

以上ノ諸説ハ目下世上ニ於テ、書ヲ美術ナリト稱スル人ノ説ナリ、余又曾テ某官、及ヒ某會員ニ就テ、親ク質セシニ、此他ニハ復ターノ説ナシ、而シテ此説ハ以上已ニ論スル如ク、一モ取ルニ足ラス、故ニ曰ク目下世上ニ於テ美術ナリト稱スルノ説ハ、理由ナキ饒言ニ過キサルナリト、(未完)

雜報

○理學士、富士谷孝雄氏より、陸奥砂野の地質と報し越されしが、紙面の都合あれば、其概畧と摘記せん、

砂野ノ地勢ハ武藏野ニ類シ、地質モ亦然リ、唯農事ニ至リテハ、其差異氷炭モ嘗テラス、余カ經過セシ線路ハ劍吉、八戸、新田、道佛等ニシテ、其間直徑六里餘リナリ、余カ老農ニ就テ聞シトコロニ據レハ、此地物ヲ生セサルニ非ス、又水ニ乏シキニ非スト、現ニ余モ雜樹ノ殖茂セルヲ目撃シタリ、然レモ此地一ツノ憂ヒアリ、ソハ猛風ノ四時絶エサルヲニシテ、其理由ハ野ノ西南ニ山アリ、東北ニ海アルニヨルナリ、夫レ武藏野ノ地質タル、最上層ニ新沖積土アリ、火山灰之カ次層ヲ爲シ、第三期ノ上層之カ次ニ位ス、砂野ノ地質モ亦之ト大同小異ナリ、然レハ砂野ノ荒蕪タルハ地ノ磽确ナルカ故ニアラスシテ、未タ人力ノ及ハサルニ由ルヤ明ナリ云々、

○當時北海道幌内炭山に在勤せらるる理學士、河野鯨雄氏より、社員へ送られざる書翰中に同所の概況と記せられたるを見るに曰く、當炭山に開採し得べき四層の炭脈あり、馬鞍形と名して現出せ、明治十三年に着手せし「トントネル」の全く此四層の馬鞍形と貫き探炭する見込ありしが、本年三月一日に於て、漸く坑口より九百二十七尺を

る第一層に達しざるに、炭層の厚さの五尺四寸にして、五十度の傾きと有し、炭質の高島産に劣らざる、此「トントネル」の外に、昨十四年開鑿せし瀧の澤西一番沿層坑の、既に五百尺、本澤西二番沿層坑も四百五十尺餘も掘り進みざるに、既に六箇の斷層ありて、甚困却せり、鐵道の今年中に炭山まで連接せしめんと、當今測量中あり、又當山起業の今年限りにて、明年よりの日々二百噸位の出炭を積むる云々とありたり

○此度渡航せられし、ジセセフ、クック氏の米國にて、有名なる能辯家あるよし、既に去る三日明治會堂に於て生物學と説き、物質説と駁せられしが、聽衆の千餘人に及びしり、今其説の是非の論せども、其能辯あるに孰れも感服せり

○過る頃、郵便報知新聞の雜報に、東京大學の學生諸氏の世の風潮に感化せられて、政黨に入るものある由、記載ありしが、顧ふに大學の學生諸氏の、夙に高尚なる學術の蘊奥と究め、夜に事物の純正なる眞理と探り、螢雪の勞と積むの地位にあれば、其一舉一動の後來の經歷に大關係

あり、左れば今日に於て、輕々しく政黨に入るかどのこと  
かきり勿論、世の風潮に化せらるゝかどの淺劣なる舉動  
のかきり、余輩の信せるところあり、

○勢州北部に、元來 Trimolite, Fluorspar の如き、奇らし  
き金石と産せ、昨年三重郡菟野村より採収しふる礦石中、  
Trimolite に類似のものと發見しされば、直ちに吹管と以  
て之と分析しふるに、Wollastonite の性質と現はしされ  
ば、必と其一種あるべしと思ひ、聞くところによれば、  
之れは常に石炭産出處に於て、寒水石と共に産せと云ふ、  
○加藤弘之、池田謙齋、大鳥圭介の三君、世話人とかり、東  
京大學の諸氏、發起人とかり、設立せられふる專攻學社  
の、去る四月三十日、東京大學三學部に於て、開會せられ  
ふる、雜誌の其第二冊が近々發兌せらるゝ由、

○東京數學會社の、來月其期年會と、東京大學三學部に、  
開き、大に社則と改正せらるゝよし、

○大學三部學に、學生の運動のために、榊原健吉氏と聘  
し、一週間に二回つゝ、擊劍と教習せらるゝよし、

○英國學士會院の會員、動物博士、チャーレス、ロバート、

ダーウイン君没と、君の動物學者の臣學にして、學術世界  
に大功あるの人なれば、吾輩の其喪と聞くや、驚愕哀  
痛、心神昏亂、殆んど絶て、而後蘇と、世の學術に志せもの  
の、皆か同感あるべし、由て其傳と記し、世に告んと欲せ  
れども、本號餘白なきと以て、今其畧傳と記し、更に次號  
と待て、君が詳傳と記さむ、君幼にして學と好み、文法學  
校に入り、後カムブリッジ大學校に轉し、嶄然頭角と露と、  
人皆之と畏愛と、一千八百廿七年及第して學士とある、同  
卅七年マストルの榮稱と得、其後専ら動植物學著述に従  
事と、其世に公あるもの頗る多し、今其最も大なるものと  
掲れば、種屬起元、人祖論、情緒表出論、動植物論、蟲食植  
物、等あり、君一千八百〇九年二月十二日シユリユースベ  
リーに生る、考譯ロバート、ダブリュー、母ウエジワード  
氏、享年七十有三、悲夫、

○又米國にて有名なる、理學博士ジョン、ウイリヤム、  
ドレーパー氏の、本年一月死去されふるよし、實に惜む可  
きことにこそ、其著書多きうち、生理學、歐洲文明史、理學ト  
宗教の爭鬭等の何れも世に名高きものあり、委細の次號

と待て、報道とべし、

○今般左の諸君の、爾後本社の爲めに、盡力さるゝことと、諾せられり、

東京大學文學部長外山正一、同理學部長菊地大麓、同理學部教授矢田部良吉、同理學部教授松井直吉、同理學部講師櫻井錠二、同理學部講師箕作佳吉、同醫學部講師村岡範爲馳、教育博物館長手島精一、體操傳習所主幹西村貞、大學豫備門長杉浦重剛、文學士井上哲次郎、同福富孝季、同千頭清臣、同中隈敬造、理學士石松定、同磯野徳三郎、同西松二郎、同谷田部梅吉、松下丈吉、中川元、東京大學幹事服部一三、東京大學醫學部長三宅秀、同醫學部教授櫻村清徳、同理學部博物場長久原躬弦、同理學部教授岩佐巖、東京師範學校長高嶺秀夫、同校教諭後藤牧太、文學士辰巳小次郎、の諸君